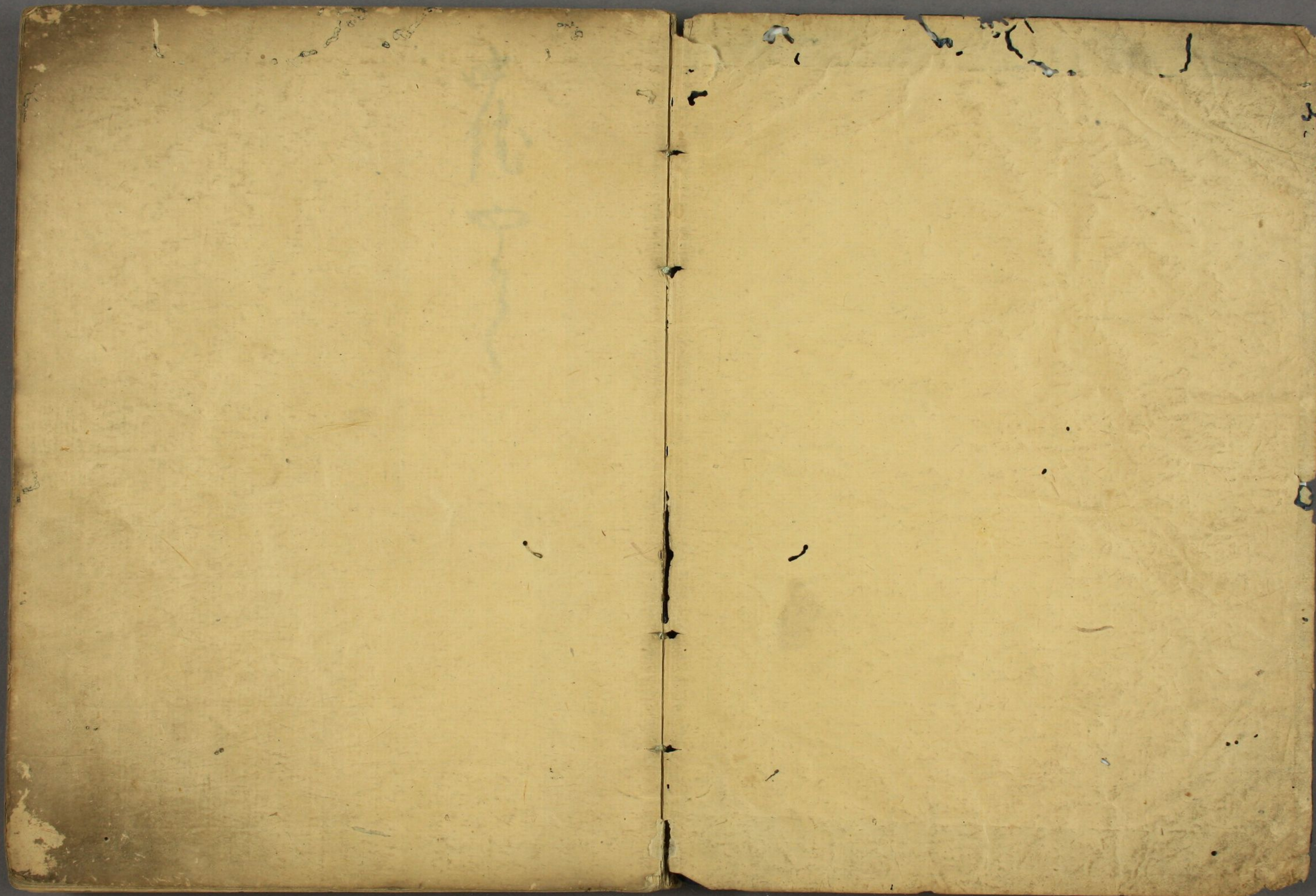




百合和歌集









中  
花  
中  
之





アムとていひし乃らるるをきねりてしあはれの  
しあふまらるるの事申にある人しりまは  
とらねんやなりしとてあつてのまゝもつは  
きやつむとせらるる花さくくひはま  
すむら乃らるるまけとつやとけりとの  
うれしことよしりけるちりもいれすて  
あつらとてしりてしあはれしあはれ  
けりせせとせらるるまけとつやと  
あつらとてしりてしあはれしあはれ  
ちのひもせしりけるけりしりてしあはれ  
ふしりてしりてしあはれしあはれ  
るるしりてしりてしあはれしあはれ

そとていひし乃らるるをきねりてしあはれの  
しあふまらるるの事申にある人しりまは  
とらねんやなりしとてあつてのまゝもつは  
きやつむとせらるる花さくくひはま  
すむら乃らるるまけとつやとけりとの  
うれしことよしりけるちりもいれすて  
あつらとてしりてしあはれしあはれ  
けりせせとせらるるまけとつやと  
あつらとてしりてしあはれしあはれ  
ちのひもせしりけるけりしりてしあはれ  
ふしりてしりてしあはれしあはれ  
るるしりてしりてしあはれしあはれ



有りてあるくもさるひくちけおひらふがねこさく  
よめさよまわくさくさくさくさくさくさく  
さけそとのいほむんしきり おはよきまのそとにけり  
たまらぬといふのゆかりてくおはせまのそとにけり  
ゆれに王にといふのまのゆれにけり  
さけにけり  
あはら山乃とつこぬゆ乃すえ  
かれしり かきまのむすまきとさりのけり  
さけにけり  
のちけし乃やうさうさうさうさうさうさう  
しきり さけにけり  
とつこあるさくさくのむさくのむさくさくさく  
おはよきまのさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく

さけにけり さけにけり

あまつよ あまつよ

さくさくさくさくさくさくさくさく  
かいて かいて  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく



























よ  
し  
人  
名  
は

よ  
し  
人  
名  
は



古今和歌集卷第一

春舟上

舟に春のけしきあり

在原元方

年乃四月春半のけしきあり  
春のけしきあり

紀貫之

神のけしきあり  
野

春のけしきあり

二條乃春のけしきあり

春のけしきあり

野

次

梅のけしきあり  
春乃千のけしきあり

素性法師

春のけしきあり  
野

春のけしきあり

春のけしきあり

春のけしきあり



女冠のすしひく

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

きのつしひく

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

少らくくのしとるた 言直

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

すしひくのしとるた

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

源まさ子久

富純 近江守長一

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

大平千里

在尔棟梁

業平朝臣男

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら

春のけつていあら我るれをいしるの常とるるを扱  
春のけつていあら







とらひてのいふまゝにさういふ事にならぬとて  
存乃とてさういふ事にはいりやけり  
おひてさういふ事

心何内所恒

春今れらるるさういふ事には通りやけり

鳩鷹とてさういふ事

伊勢

さういふ事にはさういふ事にはさういふ事

野とてさういふ事

今とてさういふ事

おつれ神とてさういふ事にはさういふ事  
色とてさういふ事にはさういふ事  
やとてさういふ事にはさういふ事  
梅花とてさういふ事にはさういふ事

しつれ花とてさういふ事

源常 漢城源氏大文臣大納

車之宗の存

豊乃とてさういふ事にはさういふ事

野とてさういふ事

素性法師

さういふ事にはさういふ事にはさういふ事  
梅花とてさういふ事

さういふ事

さういふ事にはさういふ事にはさういふ事  
さういふ事

さういふ事

梅花とてさういふ事にはさういふ事  
月夜とてさういふ事



とてしる

そね

日暮しうれしうかきし梅の花をくらねてうしうし  
くらねし梅の花をくらね

春の末乃やまゑあむ梅の花をくらねるうら

くらねし梅の花をくらねし梅の花をくらねし

ひらひらとて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

の乃のあやうし梅の花をくらねし梅の花をくらねし

つひつひとて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

花をくらねし

はつゆき

ひらひらとて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

あ乃梅の花をくらねし梅の花をくらねし

伊勢

春したらうきけと花をくらねし梅の花をくらねし

年とて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

家ありけ梅の花をくらねし梅の花をくらねし

はつゆき

今とて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

冬平梅の花をくらねし梅の花をくらねし

はつゆき

ひらひらとて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

素性法師

ちとて梅の花をくらねし梅の花をくらねし

梅

はつゆき



びんがさくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは  
けふとてはら

ほしあき

しほり春きうらひの梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

野々々

よふへ

山きりんもよもやわらう花くらくらひを我をい

山はくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

うらけさるの花をいふは

清和母后明子昌泰三年正月一日崩す 大皇太后

志仁公撰政大政本旨

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

在原重平朝下

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

素花は師

見て乃やんよもやわらう花くらくらひを我をい

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは

さくしほのや梅花心 花のあはれうらけさるの花をいふは



冬しんぢりむしにんくめ年か人くめをり  
梅のうらうらとある

はなはな

まは...のうらうらつ春をばさくしんくめ  
年とそくたをばさくしんくめ  
まらら

梅の花にけしめあひまのうらうら  
寛平のうらうら

うらうら

そのうらうら...のうらうら  
うらうら...のうらうら

伊勢

くく...のうらうら  
うらうらのうらうら  
のうらうら

うらうら

あ...のうらうら  
業平朝臣

げ...のうらうら  
うらうら

うらうら...のうらうら  
うらうら...のうらうら

うらうら

うらうら...のうらうら



さくら乃花のまかりけりてふさふさしてきた  
まけらるるまてとどけりけり

まね

我々の花をよめる人ぞりるむねをよめるま  
まけりて院のまのま

伊集

さくら乃花のまかりけりてふさふさしてきた  
ま

古今和歌集巻第二

春音下

題一十

讀入一十

春音ききまひく山乃らるる花らうろくむゆり  
まてとりまらるるまてとりまらるるまてとりま  
乃りまらるるまてとりまらるるまてとりま  
こ乃里まらるるまてとりまらるるまてとりま  
うはせまのまらるるまてとりまらるるまてとりま  
傳とつてまらるるまてとりまらるるまてとりま

惟喬文能才  
母後五位上紀種子  
右席女

櫻花ちまはちまらるるまらるるまらるるまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる







(はつた)

しんあひまもはあわさる花をばらけし  
くらのしんくちもあまのつる花あり  
櫻花をらぬまははすくのつる花をあら  
くらの花のらるま

はつた

る言のじらのいふまのいふまのいふま  
まのつるのいふまのいふまのいふま  
あらしのいふまのいふま  
まのつるのいふまのいふまのいふま  
くらの花のあまのいふまのいふまのいふま  
くらの花のいふまのいふま

九印由ケル

言のつるあまのいふまのいふまのいふま  
くらの花のいふまのいふまのいふま

はつた

くらの花のいふまのいふまのいふま

大津黒ま

まのつるあまのいふまのいふまのいふま  
くらの花のいふまのいふまのいふま

はつた

くらの花のいふまのいふまのいふま  
くらの花のいふまのいふまのいふま

手城天皇 大同天子

くらの花のいふまのいふまのいふま  
くらの花のいふまのいふまのいふま



かへぬのせな

花のなまを呼ぶやいこそをすまはしむあはれなる  
寛平御時よしののまはれなるのこ

うせいはし

それのふをいけりうも春はうらうらもあはれなる

歌  
よふ人よ

春乃さのてうくさあはれなるけりうらうらなる

さののこいそよふ

母さん

あはれなるのこいそよふなるあはれなる

らもむゆきのそらもい花のこいそよふ

あはれなるけりうらうらなる

うせいはし

あはれなるのこいそよふなるあはれなる

さののこいそよふ

あはれなるけりうらうらなるあはれなる

歌  
よふ人よ

あはれなるのこいそよふなるあはれなる

あはれなるのこいそよふなるあはれなる

あはれなるのこいそよふなるあはれなる

あはれなるのこいそよふなるあはれなる

寛平御時よしののまはれなるのこ

藤原御時

あはれなるのこいそよふなるあはれなる



春霞散を乃らくさくさくつらむる心くら乃花のほ

ありてのそと吹た

平ら立春乃さささくさく散れは心く風たのこす

うつらつた散れきてありふ

そつね

花をれを字くまうくろさるをえそしをぬれ

野一す よふくし

そ乃らくのとこまきとれくろくさるをぬれ

空乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

典侍治子朝長 寛平元年堂侍典侍 縁所別當

ある花乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

仁和の中将のなるをえん所の高くうをえ

とけはつたけ

藤原信隆 承和右少将 中納言有後君

花乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

くはむのさるをぬれ

うせい

こはむのさるをぬれ

そ乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

そ乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

野一す よふくし

ある花乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

ある花乃らくまきとくろくさるは城のさるをぬれ

小野山所







野々

ふん

いまうとあきにはくはくはなぬのまきの  
春ぬまほつるをあるがくくつるなりくしすまの  
山まゝあるまきまきとくまきまきまきまき  
まきのまきまきまきまきまきまきまきまき

はつ

若野仲彦の山歌を印うこの歌よりうら

野々

はつ

かたはるくちを乃山歌りりまきり花乃まきり  
まきのまきまきまきまきまきまきまきまき  
まきのまきまきまきまきまきまきまきまき

清友贈太政大臣 嵯峨后女

ちか

おとら春乃山歌まきりりまきり花乃まきり  
まきのまきまきまきまきまきまきまきまき

まね

梓の春いらいら平山のまきまきまきまきまき

まきのまきまきまきまきまきまきまきまき

はつ

まきのまきまきまきまきまきまきまきまき  
まきのまきまきまきまきまきまきまきまき

まね

花乃山歌のまきまきまきまきまきまきまき  
まきのまきまきまきまきまきまきまきまき



なごし

けいごのまゝに昔の庭の道よりちかぢか  
寛平の昔のころのまゝにわんせのまゝ

おまを

しよとすまやまひかきかきひん  
かしのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝ

そつね

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

なごしの朝臣

なごしのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

なご

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ



古今和歌集卷第三

夏哥

題一す

漢人一す

ワド乃はのあまのこころをさぐりてはなれぬ

このすあまのこころをさぐりてはなれぬ

いそよよはげしくもなれぬ

紅一す

あえてよもあまのこころをさぐりてはなれぬ

題一す

赤一す

は月和山部さしとまき今とけりえんころのあま

伊勢

昔こそよもあまのこころをさぐりてはなれぬ

一す

こころをさぐりてはなれぬ

いそよよはげしくもなれぬ

あえてよもあまのこころをさぐりてはなれぬ

は月和山部さしとまき今とけりえんころのあま

昔こそよもあまのこころをさぐりてはなれぬ

こころをさぐりてはなれぬ

いそよよはげしくもなれぬ

あえてよもあまのこころをさぐりてはなれぬ

は月和山部さしとまき今とけりえんころのあま

昔こそよもあまのこころをさぐりてはなれぬ

こころをさぐりてはなれぬ

いそよよはげしくもなれぬ







Handwritten text in cursive script, likely a name or title.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a name.

しんせき



















かひ乃きまけらまきてよふ

みづね

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
なほのうらみはなほのまゝにたれはる

みづね

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

高砂よりいさゝかのうらみ

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

みづね

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

みづね

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる

いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる  
いさゝかひのうらみはなほのまゝにたれはる



蘇花ちりしむしあひあひにわたりてふらんかき子に  
星貞の子乃家のまきか

文にほのすむん

秋の紅く白きあふさうなむほくちよくもの  
野々々

信止編始

冬そくねのけつとあつて我ららまはしんころ  
僧正編始

あつ乃つまをら

をきまうしあひあひにわたりてふらんかき子に  
星貞の子乃家のまきか

こゆきの朝臣

秋のよりのすまうしあひあひにわたりてふらんかき子に  
野々々

あつ乃つまをら

をきまうしあひあひにわたりてふらんかき子に  
星貞の子乃家のまきか

本院  
贈太政大臣

左の形はまじりまをら

女郎花の風こらむしあひあひにわたりてふらんかき子に  
藤原定方朝臣

三全右大臣

秋のよりのすまうしあひあひにわたりてふらんかき子に  
野々々

信止編始

冬そくねのけつとあつて我ららまはしんころ  
僧正編始

あつ乃つまをら

をきまうしあひあひにわたりてふらんかき子に  
星貞の子乃家のまきか



をまじりて筆をまきくせぬをうらなひにせん

きんぎょ

人乃るしんやかくもいふまじりてはちりあひのふりえ  
ひらりふらりふらりあひあひあひあひあひあひあひあひ  
そのまじりあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
しんぎょあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

五言

しんぎょあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
寛平のつゆあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
花んそとあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
ささあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

平家

花んそとあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

しんぎょあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

いしゆあひあひあひ

花んそとあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

はつゆあひ

花んそとあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

うせい

花んそとあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

影

平負文

花んそとあひあひあひあひあひあひあひあひあひ



竟平の御書にのたまひしに

あつらんむね

秋乃野のまのしほをすまひりそめか

素性法師

我のしほをなげんしほをすまひりそめか

野

よ

今よりあつらんむねを思ひかゝる

とくを思ひかゝるを思ひかゝる

目送るに思ひかゝるを思ひかゝる

仁利のしほをなげんしほをすまひりそめか

此等とておしほをなげんしほをすまひりそめか

このしほをなげんしほをすまひりそめか

のしほをなげんしほをすまひりそめか

のしほをなげんしほをすまひりそめか

僧正遍昭

秋のしほをなげんしほをすまひりそめか

秋のしほをなげんしほをすまひりそめか



古今和歌集巻第廿

秋尋下

いづこもさるるこの家の言合のそと

文屋やすみて

吹くは秋乃草平はさるれは山嵐のあつとふん  
まよとささるるもねもやううの浪乃花もさるけり  
秋のうなへしうけしうら

はのしとら 淋望

もそらせぬとささるるつとささるるもさるけり  
野々々

霧まきく鷹うらうけり鳥のおろ糸ははる  
秋の月けぬもささるるいささるるにわくうらうけり

らるやあ秋ささるるささるるささるるささるる

貞観乃時後侍友のまへよひの乃4あり  
けしけしーのささるるささるるささるるささるる  
ささるるささるるささるるささるるささるる  
ささるるささるるささるるささるるささるる

藤原のらるる 勝呂

あつとささるるささるるささるるささるるささるる  
ささるるささるるささるるささるるささるる

秋乃乃ささるるささるるささるるささるるささるる  
ささるるささるるささるるささるるささるる

ささるるささるる











牡丹乃ちあはけよとるまきくはるあゝのほのす  
心なる菊とていつくしのさたつていふ

素性法師

つたはらばらるるまきのあはれはら平晩  
まきくはるまきのあはれはら平晩  
よる

花うつらふは乃神とのそあもれさる  
たけさ人の比乃つてさくつていふ  
のふ

ひのしほしはれはらまきのあはれはら平晩  
世中のくまもつていふはら平晩  
つたはらばらるるまきのあはれはら平晩

はら平晩

秋のまきくはら平晩  
つたはらばらるるまきのあはれはら平晩

北河内をらね

いあそつたはら平晩  
つたはらばらるるまきのあはれはら平晩

はら平晩

いろははら平晩  
つたはらばらるるまきのあはれはら平晩

平賀をらね

秋のまきくはら平晩  
つたはらばらるるまきのあはれはら平晩



よけりといふ

は

あきうのしほのつたむしの花をよみよめは  
野よ

ふらふらうたのしらべのむらさき  
まはくひのしらべのうたのうた

ふらふらうたのうた

藤原南雄

白鳥のうたのうたのうたのうたのうた  
野よ

新河集巻八のうたのうたのうたのうた

文武天皇のうたのうたのうたのうた

まつる川とみづのうたのうたのうたのうた

又はあきうのうたのうたのうたのうた  
けまねは人九等  
他本又同

ふらふらうたのうたのうたのうたのうた  
秋の月とまづのうたのうたのうたのうた

吹風乃々のうたのうたのうたのうたのうた  
かま

霜乃々のうたのうたのうたのうたのうた  
いふ人のうたのうたのうたのうたのうた

霜乃々のうたのうたのうたのうたのうた

いふ人のうたのうたのうたのうたのうた

作止遍昭



足る乃てはそいからる。いふは、*the new world*  
ニ条乃宿の考つてゐる。いふは、*the new world*  
以屏風・部回リ。いふは、*the new world*  
たり。いふは、*the new world*

と云い

いふは、*the new world* といふは、*the new world*  
あり。いふは、*the new world*

ちや。いふは、*the new world* といふは、*the new world*  
いふは、*the new world* といふは、*the new world*

いふは

*the new world* といふは、*the new world*  
いふは、*the new world* といふは、*the new world*

いふは、*the new world* といふは、*the new world*

*the new world* といふは、*the new world*

*the new world* といふは、*the new world*

いふは、*the new world* といふは、*the new world*

いふは

いふは、*the new world* といふは、*the new world*

*the new world* といふは、*the new world*

いふは

いふは、*the new world* といふは、*the new world*

いふは、*the new world* といふは、*the new world*

いふは

いふは

いふは、*the new world* といふは、*the new world*



寛平甲子のうゑの春に

藤原なる

白浪の秋乃のふれつとありあはるる母を  
まろく、河のりりり

海上是別

とくらのあはれはなると川中の世と  
きりしこいよて

とくらのついで

しほの風のそたき  
比乃さきよとせむらのらると

こつね

風あはらるるせむらとせむらとわはらるる

まろく院乃御屋見乃

くのもらのらるる4乃とせむらとわはらるる

まろく院乃御屋見乃  
是夏の子に此夏のみ

白田の井のりつと  
まろく院乃御屋見乃

げしそわおまろく院乃御屋見乃  
まろく院乃御屋見乃

まろく院乃御屋見乃



とやらけしゆにきかれてりそそ人枯浪とんぬ  
寛平十時ありきこしたてしつれたけ  
まきれいんたのりらるるらるる  
よまてらのあやういあふふ

おぼろせ

そしりおらう水の多きう枯うかりと鼻  
井のとつんをうつたのよあかりと

はこい

年しんちからん手舞のいんまのちあ  
あ月のつよいりるあやうと  
あはくよをうらう下地とのらあ  
あはくよをうらう下地とのらあ

そらね

そらねはそらねしん  
あはくよをうらう下地とのらあ











しよ乃花のゆきあふらふとあり

小野いじの巻

花乃まに雪にまよてみすもつとてはる

雪乃しら梅乃花とある

梅乃のしらとける雪家とせいにたしとて

雪のしらとける雪

雪乃しらとける雪はゆきはゆきと梅乃

このしらとける人しとらてはる雪の

しらとける

こつね

コつねあふらふがゆきはゆきとてはる

しらとける

左原とさき

わしはゆきとけるゆきとてはるゆきとてはる

寛平中時ゆきとけるゆきとてはる

ゆきとける

雪乃しらとけるゆきとてはるゆきとてはる

しらとける

るそらのつと

雪乃しらとけるゆきとてはるゆきとてはる

ゆきとける

ゆきとける

ゆきとける

ゆきとける















古今和歌集卷第八

離別奇

題一す

在原行平朝臣

立りしつゝも乃の空にたつたれしきり合ふ  
しづかへしす

すさくたれなきけあさこりそとひり人とも  
あはれまじや井のしにけりそ人よみし  
あつらふふふのれすけり  
可いこのしづか

きこぬるおもひの田のさあひさるん  
あはれまじや井のしにけりそ人よみし  
あつらふふふのれすけり

タカノモリ

たのむ

きこぬるおもひの田のさあひさるん  
あはれまじや井のしにけりそ人よみし  
あつらふふふのれすけり

たのむ

たのむ  
あはれまじや井のしにけりそ人よみし  
あつらふふふのれすけり

あはれまじや井のしにけりそ人よみし  
あつらふふふのれすけり







はつと

きいひの(こゝろ)のまゝにさへいふは  
人よりなまじりけり

ワレも下らぬまゝにさへいふは  
あひかりたる人のこゝろにさへいひて  
いふてはまじりけり

凡河由

いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり  
いふにさへいひてあるまじりけり

いふにさへいひてあるまじりけり

藤原のつらき

のつらき

藤原のつらき  
延喜のつらき

平也とのつらき

秋もりのつらき

源乃のつらき

いふにさへいひてあるまじりけり

いふにさへいひてあるまじりけり



かまかゝりてはるるのさかきとてさかきとて  
まはるるさかきとてさかきとてさかきとて  
さかき

源三郎 右はすの實

合はる通るをくはるるさかきとてさかきとて  
合はるるさかきとてさかきとてさかきとて  
さかき

藤原甲ねとら

さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
藤原乃乃とてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかき

はるるさかき

さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかき

藤原のねとら

さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかき

備上通昭

さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかきとてさかきとてさかきとてさかきとて  
さかき

出はる



















これよりいりまへうけふそらうきりなるな  
まゝもていふことなり

あはれなりかたしきまゝていふことなり  
なほ

いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり

いふことなるのまゝうけふことなり  
あはれなりかたしきまゝていふことなり  
うけふことなり

いふことなり

いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり

そらね

あはれなりかたしきまゝていふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり

あはれなりかたしきまゝていふことなり

いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり  
いふことなるのまゝうけふことなり







古今和歌集卷第十

物名

ししり

藤原のまの朝臣

あはれの花のまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

ほろひまは

くまはまきまふまわたりてうらやまてまかたるまのま

うけせや

たねしける

浪のうけせやまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

あ

ま生巻

まよひてらまはしていまもつゝいさよふあまの鳥のまはる

こよ

まよひてら

あまのうらやまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

かほん

はな

かほんはなはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

すもも

今つゝももはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

あま

あま

あまのうらやまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

いさよ

あま

あまのうらやまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

あま

あま

あまのうらやまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる

あま

あま

あまのうらやまはくしうけらつゝいさよふあまの鳥のまはる







二葉の 葉春よりふの 名とん所とてけり  
まろくるとしなむらけりしとせしむらけり

文屋のこころ

花乃 4 葉あはれもはきいなりもあはれ

あのおくし さいのしん

いふつなまのしんあはれはらけりし

あま 平あつむす

ほしは 4 葉のあはれもはきいなりもあはれ

あま しみんす

空舞乃 4 葉あはれもはきいなりもあはれ

あま ありのみ

うんは 4 葉のあはれもはきいなりもあはれ

あま

あま

花乃 4 葉あはれもはきいなりもあはれ

あま

いふつなまのしんあはれはらけりし

あま

はな 4 葉あはれもはきいなりもあはれ

あま

花乃 4 葉あはれもはきいなりもあはれ

あま

いふつなまのしんあはれはらけりし

あま

あま







ちせし

大に千里

乃らまゝなりとれてたつまふれあへんもの  
もよほしめるとしてくはうきしけり  
乃らまゝと人のみえれよとけり

信正聖賢

ふれ乃らまゝにあやとてはゆかに

ちせしにちせし



古今和歌集卷第十一

徳守一

題一

讀人志

町多ぢやまじしあやあまあしんくひんくす

素直法師

よららぬいさくおのろふらこもていかに思ふはあはれ

紀三

うたに思波さうはなるもさそんを思ひいそあはれ

前原結后

まの所のよもはてはてはつあしはくしつらむんあはれ

在原元成

若むけいよもあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ

きりりあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ

いさ

世中いかにそむくは思ふあはれいあはれいあはれいあはれ

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ

うら車うらむさなれらりあはれいあはれいあはれいあはれ

けさんらんてつらん

在原元成

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ

いさ

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ

昔のあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれ



















くまの神のまゝに御座りて人々の心も海なりなり

せし

しんせり

よりなる海を神ももつてまはるる御座りて  
寛平の御座りてのまはる御座りて

原原政行の御座り

まはりてよりなる御座りてまはる御座りて  
まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座り

まはる御座りてのまはる御座りて  
まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座り

まはる御座りてのまはる御座りて  
まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座り

まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座り

まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座りてのまはる御座りて

まはる御座り

まはる御座りてのまはる御座りて



ついでに

君も言海なるか衣むの乃あはるるを笑ひたまは

題志

ふらふのまきしめてもゆき川冬も氷ぬみあるゆり  
あちやも露やきく人あすうかづる神のいりてかたあ

奉性法師

はらうてあすい人うらるあしうの麻をぬけう物

夜原うたぬさ

いりの後よりあはる衣志のいよ神志をゆいしほ

大江子望

若も赤はくひらあしうも喜あぬけし神とく三人

心ゆき乃物屋

ついでに物やあしう河をとれそともたなくようたかん

ついでに

さ月山本す志をうえ叶なるたぬきあすあ

凡河内あつ子

秋あはけりう時たはれあしあはらうのあしあははな

清原あつあゆ

虫のよとあはうそくあたるひも海のこしを志するあ

まればあのみあのああの高あめい

讀人

秋は山あしうしまてたなく麻よあすうあ物あはあ

題 一 うち 二 ついでに

秋のあはれあはうけるああの色あはくはあ物ああ



みづゆ

いりりし物と思へ秋の日のいさむはまに  
あやゆ

人と思ひしかりあはれむとてかふるよのこしは  
さる

秋のあさちとよのちをいさるるのこしは  
つゆ

ゆいなるよのちをいさるるのこしは  
やまよは待てる人こつこつしる

ふいぬまがしらの山の梅花つとさあははる  
なうい許まよのこしは  
まらつせうそこすしは

り

つとぬらと花をいさるるのこしは

題

坂上これのり

我意よりぬの山の梅花まろくちるよとねのま

むいよこれのり

冬けのうまわが我まらやきうなるて意こし  
うた

うまのこしとねのこしは  
やまのり

ふのこしとねのこしは  
あつきのまのしんしん  
あまの梅のりよは海をあれと人とみるあはれ







又つ孫

たのむつおそとちつらよりよむねを人きつ首

友則

命やいそあきんつるあゝるあゝ

あきあし人えお

古今和歌集巻中十

忘却之

やうのつらよりあひよ人よのつら  
よのそけあきんつるあゝるあゝ

在原業平の信

おこもせよ神よまてらふ縁ありてまのあはてあ

たりのい乃船屋のあはてあはてあ

よそつりりるよゆさる船屋

つまのあはまよまよる海川神のいぬねあは

かのあはかりくせよよあ

たりのい乃船屋

あはてを神のいつち海川神よあはてあ



題

よかん人志

下りたぐり多岐とてゆくをそつ連にさるる新しめ計  
いづれよはいにせはなぬおのちよるまののまらぬれつ  
あつあ束のあつ白雲をつりよる我えよりよるあへん物を  
しきりあつ人のいづく栞存の人なりき也

たけりひの物長

秋のよはらけあきの神づりあそあしきひりま

山野小町

みちたにさるるをよるまきね名かぬそあきのあそ

源宗千船長

あそよるあつひぬるはまぢのたうや人きつ

石船のいづれ

あつあつたをきし別よりあつらりるに物々

ありまらぬりあそ

あつあつたをきし別よりあつらりるに物々

よかん人志

あつあつたをきし別よりあつらりるに物々

よかん人志

あつあつたをきし別よりあつらりるに物々

ありまらぬりあそ

あつあつたをきし別よりあつらりるに物々

よかん人志

あつあつたをきし別よりあつらりるに物々

ありまらぬりあそ















又の世のあはれはまはれひてさうなめううまをたまて

平貞文

志の川をすすむのうらみは清い水にたづねてはまきんお

ともつま

りて

まゝなうまを命にまはれりてを命に命に

まゝなうまを命にまはれりてを命に命に

うん人志

相傳ふはまを命にまはれりてを命に命に

平貞文

物より又志る人しすは志と海を流あはれりて

うん人志

風をけし波るる海のねをれや海あはれりて

らり

いふはあはれりては志る人まはれり

池すすむ海しを命とあはれりては志る人まはれり

あはれりては志る人まはれりては志る人まはれり

ひる乃らうあはれりては志る人まはれり

志る乃らうあはれりては志る人まはれり

伊場

志る乃らうあはれりては志る人まはれり

まはれり



古今和歌集卷才十四

恋神曲

題 一 五

とらん志し

左の村さうの浪は花うらみあり人よ恋やさうら  
あひする恋はさうらあり海やあそ人よ恋うらら

つゆさ

いよのうらむは中むしとくえすは恋と恋あそ

恋うらむ

看といふを思ふまはしののちうらむくも恋

字場

羨うらむを思ふ恋うらむくも恋うらむ

とらん志し

いよのうらむくも恋うらむくも恋うらむ  
恋うらむのあまの物うらむくも恋うらむくも恋

友別

羨うらむくも恋うらむくも恋うらむくも恋

うらむ

いよのうらむくも恋うらむくも恋うらむくも恋

凡河内

かれそ人のちをうらむくも恋うらむくも恋

とらん志し

あまのうらむくも恋うらむくも恋うらむくも恋

寛平四年

あまのうらむくも恋うらむくも恋うらむくも恋



題志

山にりよ夜くうとあらひやまは結らんらの橋

そなたの道法の玉いぢ

天やえんまやゆ人のいさよひなまの板をくはら

そせい法

まかり

い海をといひりよ月のをめ月と結るつるい

らん今志

月影にけと今子やとあまのくろきすはあ

天子は穂やてりしこ志はのりあひはあなととも

え木のくりあの中はあまの風まのくろきとあま

あま志のりあをいひるのあまはまきけのあま

はのあまはあひす山あまのあひえとあま

ついで

志まのあまをあまのあまのあまのあま

あま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

らん今志

あまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあま

らん今志

あまのあまのあまのあまのあまのあま



ト云ふは也しよと云てしてまつりたると云ん  
市人のことなる等の志けしむもかたき志あるゆゑに  
夜原殿の御名乃たりひし乃御居の家なり  
也やあひひまて又つしつらとてよお満こそく  
而のありたるも人見さうしひゆるといりたる  
てよあひつりたるなり

在東葉年一物居

かきしよといひていふるん御居なるありそまされ  
あら母のナリひし乃御居とあはれあり  
すおひひつりたるなり

くん人志し

大ぬまのひしあまはる成りてありそまされ

也

ナリひし乃御居

大ぬまのひしあまはる成りてありそまされ  
題志し

くん人志し

東海あまの志也く成りてありそまされ  
むらゝい木あまはる成りてありそまされ  
く軍は志しとつりてありそまされ  
いて人をものこる成りてありそまされ  
りりたる也とつりてありそまされ  
御ありたるなり

素性法師

林鳥よしのあまはる成りてありそまされ  
寛平四年四月三日の書合なり







何れも此の心と人とのあはらるる人共は其の心國

と云ふ人共也

あつた人との心や 其の心は心と云ふ心

何れも此の心と人とのあはらるる人共は其の心國  
何れも此の心と人とのあはらるる人共は其の心國

伊勢

まづこの心と人とのあはらるる人共は其の心國

つゆい

あつた心と人とのあはらるる人共は其の心國  
あつた心と人とのあはらるる人共は其の心國  
あつた心と人とのあはらるる人共は其の心國  
あつた心と人とのあはらるる人共は其の心國  
あつた心と人とのあはらるる人共は其の心國

大伴の心

思ひて云ふ心と人とのあはらるる人共は其の心國

右のお心はあつた心と人とのあはらるる人共は其の心國

と云ふ心と人とのあはらるる人共は其の心國

此の心と人とのあはらるる人共は其の心國

この心と人とのあはらるる人共は其の心國

近院石のお心はあつた心と人とのあはらるる人共は其の心國

いふ心と人とのあはらるる人共は其の心國

題名と云ふ心と人とのあはらるる人共は其の心國

まづこの心と人とのあはらるる人共は其の心國

讀人志と云ふ

まづこの心と人とのあはらるる人共は其の心國



保延八年二月廿九日氏十四年乙卯

中納言源昇物長あつきのすけは侍々々州より

て御祈り奉る 因後

あふ所のゆあけをいあふを弄るゆえとて

題志くく 伊揚

あふよあふあつて我あふ人乃山のあけ

白鷺

山乃乃紅ゆえなるまづり人をいれ

酒升人志

あふの志くく人乃の志くく物あふ

人志くく

あふそのかえと我あふあふ人な

あふ乃まより人乃いよあふいよあひ

あひいからあひいよあや乃あひい

さかるとて志くく人あひい

あひい志くくあひい

あひい

あふその乃の志くくあふその志くく

題 人志くく

あふそのいよあひいあひい

あひい











いふことはいふ物成さるゝの成るゝなり我とていふ  
なれど思物く事なつてあつてことのもつてやあつ  
月夜なれぬ人きふかきつりぬもあつて人きふかき  
うさう結田らまてなれぬもあつて初めは海を望む  
あつてなれぬ人の秋風いふさけけりていふ人  
ひくく成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ  
かひん乃折りてん  
すゝの成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ  
なり年約はあつて志りて約なるといふ成るゝ成るゝ  
なれどあつてやあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
とんてつるゝ  
三つあつていふ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ  
成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ成るゝ

伊豫

題

雲林流乃々

常康親王  
仁明子

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
小野小町

いふこと我れ時あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



顯石記

かけのり乃抄のえん

かゝるれとありてまゝにけりけりあやあひんと思  
ともなる

此同を力成りてしあるも人乃心の元よりん

源宗平の信

つれなく成ゆく人乃ものそれよりあひなりあ  
あつらそこもつるまらあひのまて侍る人乃  
とてあつらせりて後とつりたれとあつら  
つりてり

無清 右京高純卿の女

志す乃山ありてをたをゆりつゝ人乃りまらあつら  
あひのまらなる人乃ややくかたつらなる  
何れもやけりちのまらあつらつり

たれ

小町のおね

時をそかたゆくの清華のいまはあひのまらなる  
あつらなるあつらなる人乃まらなるあつらなる  
あつらなるあつらなる

冬にのりて我成りあひのまらなるあつらなる

題 一 ねん

とものである

あつらなるあつらなるあつらなるあつらなる

よかんあつらなる

尺をせ川ありてあつらなるあつらなるあつらなる

あつらなる

吉野川よりや人をつゝあつらなるあつらなる

よかんあつらなる



世の人の心は我をあらうのいやまはるあそむる  
心こそこそあはれあうらうあうらうあうらうあ

あうらう

色もくろくもあつきの人の心は我をあらう

ふらん人志

我のやうに思ふ心は我をあらうの心は我をあらう

素性法師

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

讀人志

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

ひのゆさうあうらう

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

宣平山時山房月よりせ給ひらる時久

てんらう

素性法師

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

題

林乃田のいひよふことあはれなるあうらうあうらうあ

あうらうあうらう

初稿のあはれなるあうらうあうらうあうらうあ

あうらうあうらう

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

曲字原るあうらうあ

あうらうあうらうあうらうあうらうあうらうあ

喜母







林風の鳴くかき高のふれをくわくわくし  
と見人志く

枯くそくそあをそくあを人のふれとあるを  
又とあるくわくわく人くわくわく

坂上是則

あつとけたりし橋乃よくとくをさるるちよ  
とく乃

いんあつけあつあつと成る人まはし  
讀人志く

たつたをいせの心乃中一落るりの川乃  
や物

古今和歌集卷第六

復傷方

いりこの乃まらりよけり何よめり

少将いさむらひ乃物

たつたをいせの心乃中一落るりの川乃

いさむらひ乃物いさむらひ乃物と白川のあり

よきけりたる東よめり  
延喜式比太政大臣只三人也  
仍雖不詳人前ト也  
前は之由也

素性法師

ち乃渡おりてそくそく白川を去る成す乃あ

堀川乃物いさむらひ乃物いさむらひ乃物

時よあつこのいさむらひ乃物いさむらひ乃物

僧正勝延

昭宣云復平三十三月癸丑五十六  
太政大臣国自始











ら相りして多りその又乃し一見れ人西つて  
てあるるかうかり流り下るとあるい多きと  
くよめり

僧正盈昭

見れ今を花の衣は成り也之け乃流より流るうあせよ

河原の相見いあつらふ人乃し海よりて乃秋の

平城源氏歌 寛平七年八月廿五日 卷七十三

家の相見いあつらふ人乃し海よりて乃秋の

もあつらふ人乃し海よりて乃秋の

久れ

寛平七年十月廿七日 皇太子傳  
能有 文徳源氏

うらけはあひひあつらふ人乃し海よりて乃秋の

板原乃うらけはあひひあつらふ人乃し海よりて乃秋の

乃及町乃有記りりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

つゆい

町乃有記りりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

楊をうらけはあひひあつらふ人乃し海よりて乃秋の

はあつらふ人乃し海よりて乃秋の

よめり

紀乃りりゆさ 茂行

花より人乃し海よりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

あつらふ人乃し海よりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

よめり

つゆい

あつらふ人乃し海よりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

河原のた乃相見いあつらふ人乃し海よりて乃秋の

後の家乃海よりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

雨のあつらふ人乃し海よりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の

あつらふ人乃し海よりてあつらふ人乃し海よりて乃秋の



利基 言五元

飯原 乃中納言してすはる  
市一の勇海りて後人としてすはる成より  
乃中納言してすはる  
さきさきありし御裁もいささけくあれり  
々海をみくやくさあはゆふれとて思や  
とんた

秀一 乃中納言してすはる  
あはる乃中納言のちり乃中納言  
ともあひなれどかきてさりたるは  
かりけり

おとなしきもの業をていさる人  
題 乃中納言してすはる

乃中納言の病よわらう時多しけし  
えしなりと花をけり人白きもの  
或乃中納言困後乃中納言  
さきさきありし御裁もいささけくあれり  
乃中納言してすはる

乃中納言の病よわらう時多しけし  
乃中納言してすはる  
乃中納言してすはる



やまひまらうひゆらなれらのいあひけなむ  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる

大いさま

ひまらうひゆらなれらのいあひけなむ  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる

原原出れり

原原出れり  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる

けりひく乃物也

けりひく乃物也  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる

ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる

在原志行たれ

在原志行たれ  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる

ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる  
ゆいせんとよんそ人ふりまうつらなる



古今和歌集卷第十七

雜歌上

題

よふ人かこむ

秋とよ露をたぐなむあまの川にさる舟のいづせりか  
おやとらまふおやの末に唐錦しつまけし物あそび  
うけい成るあつまへて夜こひのいづせりまはし物  
かきりたふさるあまのたぐはしつこひあまをたぐ  
あまのいづせりあまのたぐはしつこひあまをたぐ

の也

葉のしづよむむしうまのまふあまのあはれをさ  
おのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ  
くまをさるあまのたぐはしつこひあまをたぐ

なりのひのたぐは

はまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

大納言取りのくまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

くまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

あまのたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ

高子貞観八の二月十日十一日十一月十一日三月の皇太子  
二葉のたぐはしつこひあまのたぐはしつこひあまをたぐ  
え廣子の二月即位日の中宮の二月の皇太子

春宮母儀其也















元来はことごとくなくしてありなむ

おひあまはしあお刺のありとていよとたまのゆき

ぬ

なりひ乃船長

常はしあぬおのなくともなりなけり人のまじ

寛平一山何ささ乃まじ音合のさ

ありし乃しゆ

白き乃やふり志けるく心ふくくおひよるる

お年一山何乃るるのさあひあてよのこも

おひあささまひひくおひあさひあり乃つて

おつさうまじ

おひあもてたより視身とせありさんおひひくあま

題一 ぬき

うん人

子やあさうちのそ唯なはすいあれとさよふはあれ

はれをささくおありすこのえ乃船の唯ねいよあん

すさう乃さし唯ね人なりしよさうとさなはあ

あつさらいさ乃こねまよつちのよふくおまじ

はちをあら人のいさうさありの人まらせ

かしく世とやほくんさ船の舞のよはれらねさ

後原あさ

ふれさも志る人よまら船のねとむの夜あさ

うん人

はる海のおうろ志のひさうふあまのまおあ

はる海乃さうさあせらる波の流りてゆるあつら

はるの原とせらる波の志とくたまのわささ







かゝるもいふ所ありしより

真せし法

ましましてひらきまゝかゝるもいふ所ありしより  
ぬのひらき乃勝みてよめり

正原の平船

あさちをいひのりまひのひらきまゝよのひらきのなまを  
布引乃いひのりまゝて人々あつまりて言ふん多  
すのよめり

たりのひらき乃船

ぬのいひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて  
りいひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて

取均法師

いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて  
いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて

題一 疋

神の法

法乃せしめていひのりまゝていひのりまゝて  
一 船門はまゝていひのりまゝていひのりまゝて

伊豫

いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて  
朱羅院乃いひのりまゝていひのりまゝて  
いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて  
いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて

橋乃りり

いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて  
いひのりまゝていひのりまゝていひのりまゝて

うんん







古今和歌集卷才十

雜歌下

題志

讀人

帯はちふつひるの影を川に流す水に流す成  
つらとありて我身となすまじくあまのつらりは思ふて  
石のくさぬの釣糸をばしめおのひつらあ世帯はる

山登り管見

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

つらとありて我身となすまじくあまのつらりは思ふて

りつら

よのちつら

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

つらとありて我身となすまじくあまのつらりは思ふて

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

山登り管見

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

題

讀人

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

山登り管見

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる

山登り管見

あはれとてまじしなむ。こもあはれまらまけしわあはる







高津内親王 桓武女

あまの人のつくはるる乃天の宮也

つらきつらき中とてつらき人乃あはれ人なり

あまの國はたつたれてつらき時よりなり

つらき乃物也

思ひやむかひはあまの宮にありてはつらき人なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

在原乃平物也

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

た近の道とけつらき時よりなり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

あまの人のつくはるる乃天の宮也

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

平内乃物也

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり

つらき乃あまの宮にありてはつらき人の世なり



ひりかたに空をたそがせしむる物心ひき  
かつく侍けの時七条申す乃と冠をとりけり  
ぬすむとそまづかりける

伊勢

久しの中よおひる雲をたひりとのそよみしる  
さ乃とくしきう河波のすけまかりけるけり  
をれむけもんとくそよとひとくかりける  
かあままりありとそよまかりける  
なれとつりける  
なりひる乃船  
まかりける物とくそよとくかりける  
おれとつりける  
おれとつりける

とそ海りりけるそよいえ乃とくかりける  
おれとつりける  
おれとつりける

よすれてい後とそおれとつりける  
深き乃とくそよとくかりける  
おれとつりける

おれ

おれ

おれとつりける

おれ

おれとつりける



しうたけあるくむーかこありたるとうふお  
といとす成よふれと誰波なる三つのもちのまじり  
ては成とらうそをせらるつるせりたるとなん  
つら  
せり

なふらういしむまのせりけをり成のちまの成  
とけいともいふとせりけをいまじりてつせりそ  
友らりるそつらうそてこけりたるりもよらうつ  
りけり  
たつこ

水乃而おあつこけり成のけりあはれけりそてあ  
くそとてそつらありたるけりあはれけりそ  
めり

あつそつらあつそつらあつそつらあつそつら  
しひよのあつそつらあつそつらあつそつら  
そりありたるそつらあつそつらあつそつら  
つらあつそつらあつそつらあつそつら

あつそつらあつそつらあつそつらあつそつら  
宗岳大執  
あつそつらあつそつらあつそつらあつそつら

思やあつそつらあつそつらあつそつらあつそつら  
題名記  
後人記

あつそつらあつそつらあつそつらあつそつら



我店は之痛の心で志すは度々いさよ也故と云

森松法師

日之庵を誂のころ志すは度々いさよ也故と云

久人

あれをあらはれしよの言はふす久人父の言はふ

一 ちよまよりちよ時はあれはちよあは女の琴ひき

くら成すてとれたてしれりけぬ

うしよのせい

よひのまじり言とちよちよちよちよちよちよちよ

吹流まきうつたよちよちよちよちよちよちよ

よよめ

二條 源のちよ

ふちのまじり言とちよちよちよちよちよちよ

題不知

久人

常のつれ。市でまをんぬのまをんぬのまをんぬ

あはれ月め月め月め月め月め月め月め月め月め

外のちよあはれちよあはれちよあはれちよあはれ

無成りてよ

任理

飛鳥別ちよあはれ我言もせよちよちよちよちよ

はくはつるちよちよちよちよちよちよちよちよ

くちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

紀夜則

あつちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

ちよちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

け

ちよちよ

持するちよ























春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

題一 雑言

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

誹諧歌

題一 雑言

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

藤原のこころの物語

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

藤原のこころの物語

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

題一 雑言

九河内船櫃

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

僧正通照

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの

久人

春のまはるけしきよまはるけしきよまはるけしきよ  
うきものうきものうきものうきものうきもの



秋者乃ち秋てふれをまゝ了るのすゝをなす  
節も今も相々すれども良辰うてある由もあふ  
寛平 陽射さすの天の香のむら  
在原むら

秋風よけりいれし ぬく風つらきせよきあくる  
あきまきと人へけり日とありし秋のむら

雪やあふく 夕成てふるよりふりつら  
けり

清原あやめ

冬やうまのむらけりし中へけりてはぬはぬ

題 げん人志

いよのころあふく神さくくはるまねをら  
物なりあふりきりてはぬはぬはぬはぬ

あひうかきかきをありしけりしはるまね  
ありぬやとあらかてあひまきくはるまね  
あひまきくはるまねをありしけりしはるまね  
あひまきくはるまねをありしけりしはるまね  
いよのころあふく神さくくはるまねをら  
物なりあふりきりてはぬはぬはぬはぬ

紀あり

あひまきくはるまねをありしけりしはるまね

小野山所

人はあひまきくはるまねをありしけりしはるまね

寛平 陽射さすの天の香のむら

清原あやめ



飯原相之周

昔は人の心は静かにありてなりてくはるる人の心は

たゞ

くはるる

人の心は静かにありてなりてくはるる人の心は

平貞文

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

静かにありて

静かにありてなりてくはるる人の心は

くはるる

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

くはるる

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

くはるる

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

静かにありて

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

くはるる

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は

昔の静かにありてなりてくはるる人の心は



















はるをのえもかろりかけおれを看るたけはまよし解  
つはひのまねおれも落すりたうし志あてなてき

かいこ

かいこはちやもろくけしなままおれをるまの忠  
心とゆえおれも一と解んて人おれもまとうてらん

かいこ

おれのかうえしはあはなる物のためまうし解ん  
冬乃が笑成るすつりのこ

友原敏行の巻

ふやらのちの中へ落乃はあにねらるのよあま  
らるる



家々林檎本之平名書入心墨城并 と別

巻第十 物名記

いしりー ー ー ー ー

私人を交本いりーあれぬのいひいりーいりー

在郵云下空物上勝位

かけりも有ありー海のまもるんかいけのせ成あね

やう海の本反別下

くねのせも ー ー ー

あし時こいいつとれいタムれのせのれいんさる

悪原利貞下

きいの井 かんやさー

きいのわて君もやくりりーあきーいんさる海乃別

かーと清乃下

なやとのあもー あやりり

うにやゆんさるあもーいそつれゆーあもーいりー

あつさるあもーねんさるあもーいりー

うりりーうもよさるけよよあね

巻第十一

貞心のまもるの志のこある者下

きんさるあもーいりー大井いりーあもーあもー

まねもよあもーいりー志のすにあもーあもー

巻第十二

あひくさるあもーあもー

いりーあもーいりーあもーいりーあもー



あつこあつこくあつたよあつたよあつたよあつたよ  
うまうま

あつこあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

卷第十

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよ

あつたよあつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

あつたよあつたよ



古今和歌集序

紀洪宣

夫和歌者託其根於心地發其葩於詞  
林者也人之在世不能無為思慮易遷  
哀樂相變感生於志蘇形於言是以送  
者其於樂怨者其辭悲可以述懷可  
以發憤動之地感冠絕化人倫和夫婦  
莫宜於和歌和歌有三義一曰風二曰賦  
三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春宮之  
聘苑中秋蟬之吟樹上龍吟曲折各

發歌謠物皆有之自然之理也此白神  
也七代時質人淳情歌每分和歌未作遠  
乎素象鳥尊到出雲國始有之十一字  
蘇合反歌之作也其後能之神之孫海  
童之女莫不以和歌通情者爰及人代  
以凡大興長歌短歌旋頭混存之類新  
躡非一源流漸繁譬猶拂雲之樹生自  
寸苗之煙浮之之波起於一滴之露泉  
雖波濤之研獻 天皇富緒川之篇結



太子或事國神異或與八述玄但見上  
古歌多存古質之語未為耳目之歌  
後為教戒之端誠古 天子每良辰義  
景韶侍臣預宴筵者獻和歌君臣之  
情由斯可見賢愚之性於是相分所  
以適民之欲擇士之才也自大漢天子白皇子  
之物作詩賦詞人才子慕風繼塵後  
彼漢家之字化我日域之俗民業一政  
和歌漸衰然猶有先師掃奉大夫

者高振神妙之思獨步古今之間五山  
多素人首並和歌化也其餘業和歌之綿  
綿不絕及彼時衰澆漓八貴者淫浮詞  
雲與艷流泉涌其實皆落之氣孤榮  
至有好色之家以此為花鳥之使乞食  
之客以此為活計之謀故半為婦人  
之右難進大夫之前近代存古風志續二  
三人然長短不同論以可辨花山僧正  
尤得歌之辨然其詞花而少實如篇



畫好也徒動人心情在象中將之款其  
情有餘其詞不足如畫苑雖少彩  
色而有畫意香文琳巧蘇物然其辭  
近俗如賈人之著鮮衣字治山僧  
撰喜其詞花麗而首尾滯滯如皇  
秋月過曉雲小野小町之款古衣海  
之流也然然而無氣力如病婦之看花  
粉大友黑玉之款古棖凡大吏之次也  
頗之逸無而辭甚辭如田夫之息花

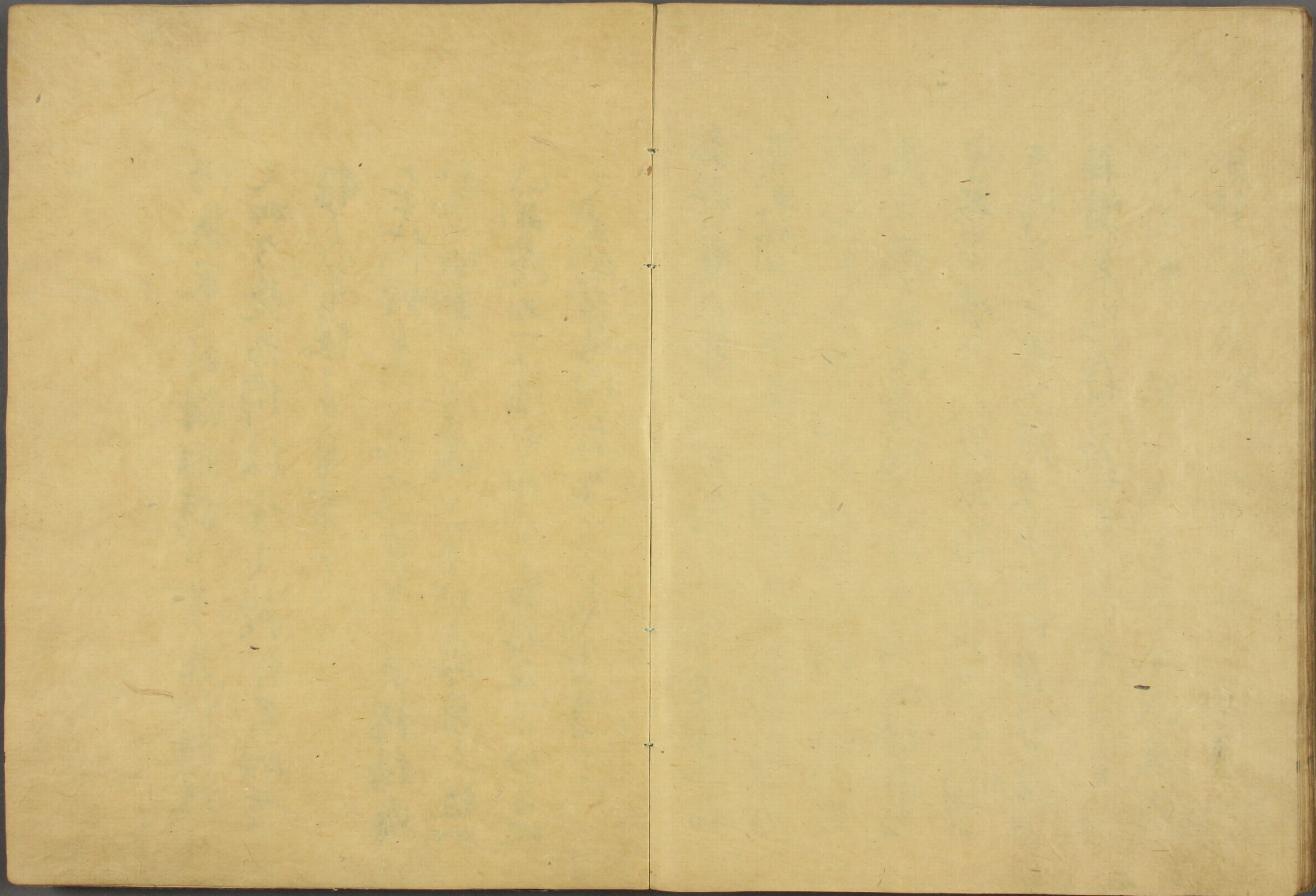
此外

前也此外世流因者不可勝數其天底皆  
以款為基不知款之趣者也俗人車車  
榮利不用蘇和款悲哉忠不節貴無  
相約富銀金錢西骨未腐於土中  
以心藏於世之適為後世汲汲者唯  
和款之人而已何者語近人耳義慣  
神明也昔平城天子詔侍臣令撰萬  
葉集自余以來時歷十代數過百  
其後和款棄不被採除風流如雪



相輕情必在納言而皆以他才同不以  
斯道顯 陛下所字于今九載仁  
流秋津洲之小惠茂瓊波山之浩測  
爰為願之教寧々因以所長為器  
頌洋々益耳 思繼既絕之月欲發  
廢之道爰詔大內記紀友則所書所  
預紀貫之於甲裝少目凡河內躬桓  
右濤門府生至生忠岑等各獻家集  
并古來高欽曰續新集集於是言也  
詔部類而奉之欽勒為二十卷名曰  
古今和歌集 且為詞少春苑之題名  
竊神受之長况哉進恐時俗之嘲退  
慙才疏之拙通遇和歌津興以樂音為  
之再昌境乎人凡既後和歌不在於  
于時延嘉永及歲次乙酉四月十五日  
臣貫之等謹序







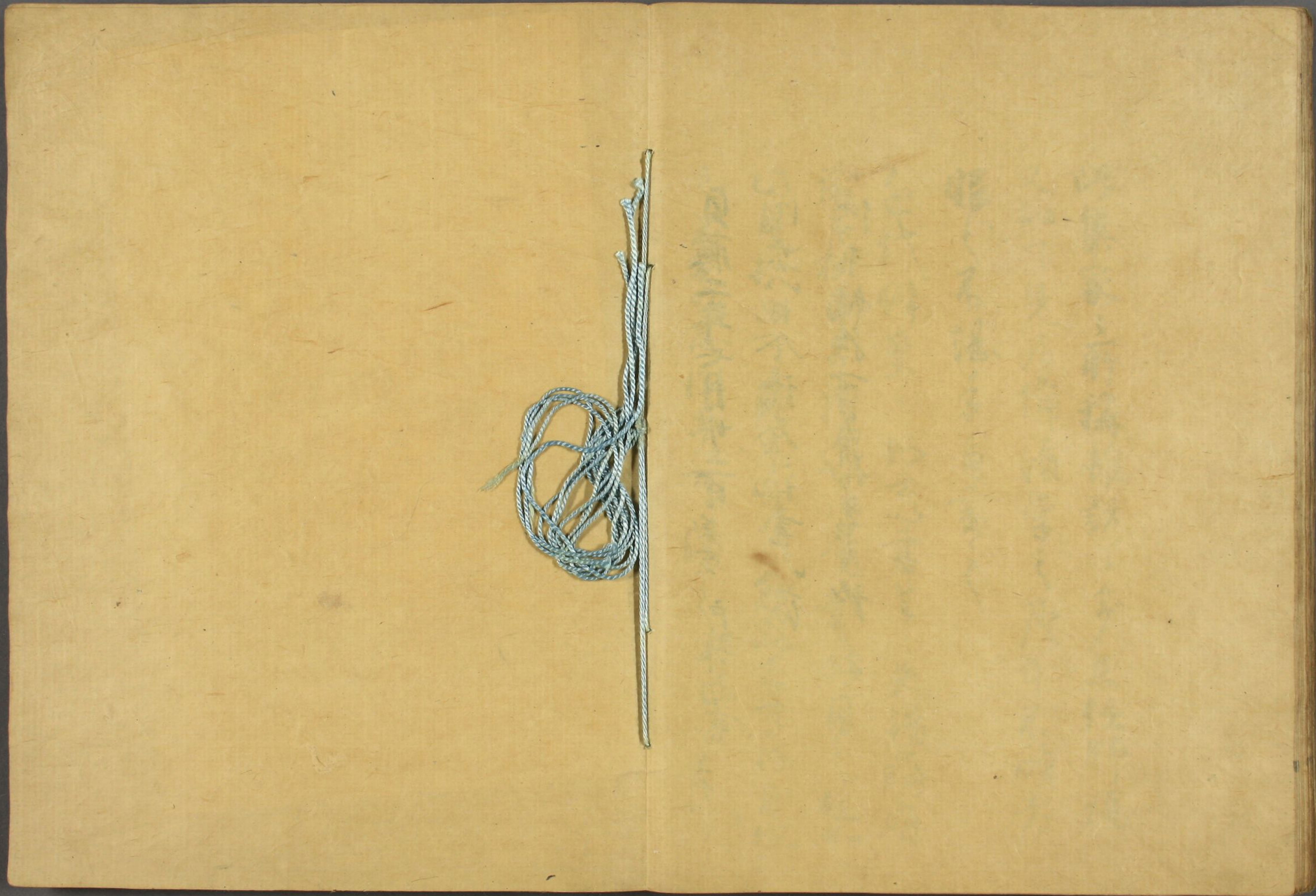
此集家之所稱雖說之多且任師說  
又加其見為備後學之說亦不顧若  
眼之不堪乎自書之

色代僻處之好士以書生之失錯稱有  
識之秘中之得道之魔姓不用之他如  
以用於只可隨其身之取好不用自他  
之差不志同者可語之

貞應二年七月廿二日 美亥 戶部尚書 在判

同廿一日令讀合玩書入落字了  
傳于嫡孫可為好書之證也







以下全て  
白紙



